

次世代にとどけ！—漁業の町銚子の食文化と伝統行事—

銚子市漁業協同組合 女性部
高尾 美津江

1 地域の概要

銚子市は千葉県北東部に位置し、古くは利根川を利用して北から江戸に物資を運ぶ高瀬舟による水運の中継地点として栄えた。また沖合では黒潮と親潮がぶつかり合い、さらに利根川から栄養豊富な水が流れ込むことから好漁場が形成され、漁業の盛んな地域として知られている。

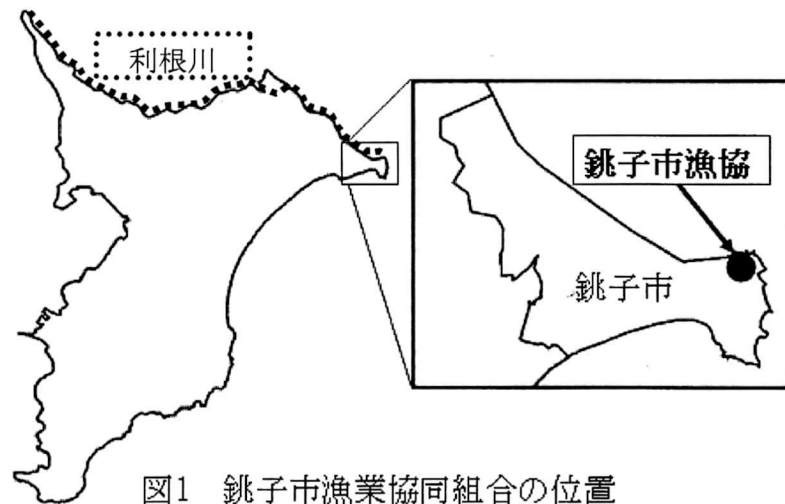


図1 銚子市漁業協同組合の位置

2 漁業の概要

銚子市漁協は平成8年に銚子市内の6つの漁業協同組合が合併して設立され、345名の組合員が大中型まき網、沖合底びき網、サンマ棒受け網などの沖合漁業から、小型底びき網、一本つり、はえ縄などの沿岸漁業に至るまで様々な漁業を営んでいる。水揚げ量の大半はまき網や棒受け網によるサバ類、イワシ類、サンマなどの浮魚で、平成20年には3年連続水揚げ量日本一となり、これを冷凍・加工する水産加工業も盛んである。

3 組織と運営

私たち銚子市漁協女性部は平成8年の組合合併後の平成9年に発足した。しかし以前から各組合には婦人部があり、それをまとめる組織として銚子地区漁協婦人部連絡協議会が存在し、合併よりも前から共同で活動を行ってきた。

私たち女性部には平成19年度末現在、120名の部員が所属しており、この中から毎年10名ほどを役員として選出している。女性部の活動は食育を含む魚食普及、男女共同参画、地域文化の継承と大きく3つに分類され、日常的な活動は役員が中心になって行っているが、イベントなど人手が必要などときにはみんなで開催している。

4 テーマを選んだ動機

銚子市は漁業の町として全国的にも有名であるが、人口は減少傾向にある。この原因は働き場所が少ないことなどによる都市部への人口流出、土地が狭く土地価格が割高なことによる周辺市町への人口流出などと考えられるが、今後も人口の減少が続くと今まで引き継がれてきた銚子のいろいろな地域文化を次の世代に引き継ぐことが難しくなる。

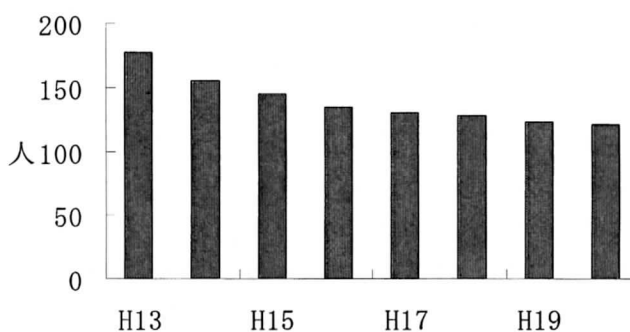


図2 銚子市漁協女性部員数

漁業を営んでいる家庭においても子供は都会に出て漁業を継がない傾向が見られ、女性部員数も図2のように緩やかではあるが減少を続けている。

このような中で、私たち女性部が地道に行っている様々な活動の重要性を見つめ直し、漁家の若い人たちなどに漁業の町銚子の地域文化を伝えたいと思い、この「次世代にとどけ！漁業の町銚子の食文化と伝統行事」というテーマを選んだ。

5 地域文化の継承活動及び成果

私たち女性部では先にあげた魚食普及、男女共同参画、地域文化の継承の3つを軸に活動を行っているが、この中で今回のテーマでもある地域文化の継承活動は食文化と伝統行事の2つに分けることができる。

1) 食文化の継承

全国各地に地域独特の食が受け継がれているように銚子にも昔から伝わる伝統食がある。漁業の町銚子には水産物を使ったものが多く残されており、その一つが「海草」といわれる食品である。私たちは食文化の継承として、この「海草」を「くろしお海草」と名付けて製造販売を行っている。「海草」とはコトジツノマタという紅藻を煮固めたもので、銚子では一般的に食べられており、正月にはかかせないものである。

一般からのニーズは多いが、製造施設が小さいことなどもあり、現在は関係者への注文販売がほとんどで、一般への販売は残念ながら年1回の「銚子市産業まつり」のみとなっている。

また、銚子の伝統食として、昔から大量に水揚げされるイワシを用いて伝統的な調理法で作るつみれ汁がある。私たちは平成15年から年に数回地元の小中学校に赴き、つみれ汁の料理教室を行って



り、魚嫌いな子供でも食べやすいように骨が気にならない調理法でつみれ汁を作らせることとした。子供達にはなるべく魚を手で触ってほしいという思いもあり、イワシを実際に手開きでさばかせた後、すり鉢を使ってよく混ぜ合わせ、つみれを作らせた。

魚を触るのも最初はおっかなびっくりな子供達であったが、だんだん慣れてきて最後はうまくイワシを手開きにしていた。

つみれ汁が完成し、みんなで食べた時の子供達は、自分たちで作ったという達成感と手作りのおいしさで自然と笑顔がこぼれていた。これを見て私たちは、本当に料理教室をやってよかったなど喜びを感じた。

また、より多くの人にこのつみれ汁の味を知ってもらうために、「銚子市産業まつり」などのイベントの際にもつみれ汁を作り、来場者に無料配布している。



写真 2～5
小学校での「料理教室」

2) 伝統行事の継承

次に伝統行事の継承であるが、銚子には漁業にまつわるものが多く残されており、そのなかで私たち女性部の行っているのが、江戸時代末期から続くと言われる明神講である。

利根川の河口は「てんでしのぎ」と言われる難所であり、銚子に利根川が流れるようになる前から海難事故は後を絶たなかった。このため、河口を見



写真 6
川口神社より利根川河口を望む

下ろす高台には川口神社が平安時代に創建された。この神社では年に一度7月に漁の安全と大漁を祈願する大潮祭りが、地元の漁業関係者総出で行われてきたが、同じく漁の安全と大漁を祈願する明神講といわれる行事を月に一度、漁家の女性だけで行っている。

昔は銚子でも女性は船に乗れず、もっぱら陸の作業を受け持っていた。船が漁に出ている間、女性は陸で航海の安全と大漁を祈ることしかできず、このお祈りを川口神社で漁家の女性と一緒にやるようになったのがこの明神講の始まりである。この神社を地元では明神様と呼ぶことから、明神様で行われる講社ということで明神講と言われている。

明神講では参拝や境内の清掃のあと、航海の安全と大漁を祈る「神のはなみ」や「ほめことば」をはじめ、江戸時代のイワシ大漁時に作られた「銚子大漁節」、仕事歌とも言われる民謡の「木遣り」などを唱和し、伝統文化を今に伝えている。

「銚子大漁節」には踊りがついており、「きんめだい祭り」などのイベント時には女性部員によりこの踊りが披露されている。この踊りは地元小学校でも取り上げられており、女性部員が教えに行ったこともある。そのため、銚子では多くの人が「銚子大漁節」を踊ることができる。



写真7 明神講



写真8 銚子大漁節の踊り

6 活動の波及効果

まず地元小中学生を対象にしたつみれ汁の料理教室であるが、今年度に行った2つの小学校の計77名の児童に対し料理教室の後にアンケート調査を行った。表に示したように77名中、「魚を食べるのが好きか」の問いに対して「いいえ」と答えたのは14名であるが、このうち13名はつみれ汁はおいしかったと答えている。また、アンケートの感想欄には「魚を初めて触った。」「魚は嫌いだけどつみれ汁はおいしかった。」「魚は嫌いだったけど好きになっ

表2 料理教室を受けた小学生のアンケート結果

問い	計	回答		
		はい	いいえ	無回答
①魚を食べるのが好きか?	77	61	14	2
②つみれ汁はおいしかった (上記①「いいえ」14名中)	77 (14)	76 (13)	1 (1)	
③海草を食べた	26	23	3	
④海草はおいしかった	26	20	6	

た。」「魚は嫌いだけどつみれ汁はおいしかった。」「魚は嫌いだったけど好きになっ

た。」という書き込みも見られた。実際に魚を触り料理を作るという体験学習は、つみれ汁という伝統食の継承だけではなく、子供の魚離れを防ぐ意味でかなりの効果があったと思う。

私たちが製造した「くろしお海草」も1クラス26名だけではあるが試験的に食べてもらい、これについてもアンケートをとってみた。地元で一般的に食べられているものではあるが、多少癖がある。そのため「海草」を食べられない子供が多いのでは、という当初の予想であったが、おいしいと答える生徒が予想外に多く、喜ばしい反応であった。

最後に明神講の継承である。今まで1月以外は曜日に関係なく毎月12日に行ってきたが、平成20年から12日の前の日曜日に行っている。そのため、仕事の多い若い嫁でも参加できるようになった。平成20年にも新たに1名が女親から引き継ぎ参加しており、銚子の漁家では女親から嫁へと明神講という伝統文化が着実に継承されていると実感できる。

7 今後の課題

食文化の継承である小中学生を対象とした料理教室は今後も継続して行っていく予定であり、料理教室を行った子供達につみれ汁のおいしさや作り方がどれほど伝わっているか、追跡調査をする必要があると思う。その結果によっては、新たに小さい子供を持つ親を対象とするなど、料理教室に工夫を加えていきたい。

明神講は100年以上も続けられてきた伝統行事であり、次の世代に引き継いでいかなければならないと自負している。しかし、今後いかに続けていくかが課題である。漁業の町銚子に伝わる航海の安全と大漁を祈る明神講の大切さを理解してもらい、一人でも多くの漁家の女性の参加を募っていきたい。

今は、魚の値段が安かったり経費がかさんだりと、漁船漁業を続けていくことは決してたやすくありません。しかし、地域の伝統は私たちがしっかりと受け継ぎました。今後も漁業の町銚子の食文化、伝統行事を絶やさないように、みんなで力を合わせ次の世代にとどけていきます。

<p>神のはなみ</p> <p>神に参らば神を持ちてオヤ 榊は神のよ一宿り木よ 猿田三社の権現様 オヤ ぶんぶい一諫めの条々が増す 神の通いを押しわけみればオヤ 黄金の米がよ一降りつもる オヤ 黄金の米がよ一降りつもる 叶うた叶うた上思うこと叶うた オヤ 末は鶴亀五葉の松 おめでたや いやなあひょうたんよ</p> <p>明神参りに袖をひかれオヤ これも明神さんの御利生かや おめでたや いやなのようたんよ こりやまた一座 明神様繁昌 すんまいだ 子ヨイチヨイと祝うて 商売繁昌すんまいだ おめでたや こりやまた一座 講社繁昌 すんまいだ 子ヨイチヨイと祝うて 繁昌 繁昌 繁昌 こりやまた一座 浜大漁 すんまいだ 子ヨイチヨイと祝うて 大漁 大漁 大漁</p>	<p>ほめことば</p> <p>ヨーイ チヨイと一つほめ申そう 明神様の御前の松の木に めでたき鶴が巢を組んで 一二玉子を産み育て 一二玉子に目鼻つき 親子もろとも はがい揃うて お酒盛り 銀の銚子に金の盃 細く流れる銚子口 オーツ押えつ この酒頂戴する方は ご寿命も永く徳もあり福もあり 三福一対ほめ申そう 一に銚子が大漁で 二にこりやとえびす顔 三にざくざく札勘定 四には新木の船おろし いつも銚子が大漁で 総方祝でおめでとうとほめ申そう またまた一つほめ申そう 海の中には教あれど 中にも海老と申するは 年若なれどひげ長く 頭に甲を頂いて 目には金銀の玉を入れ 背には見事な鎧着て 腹には万余のお子抱いて 尻尾は源氏のたて扇 ピンとはねれば 万々長者とほめ申そう 明神様は益々繁昌で 浜は大漁 大漁 陸満作で 航海安全で 御めでたいとほめ申そう こりやまた一座 明神様繁昌すんまいだ</p>
<p>銚子大漁節</p> <p>一つとせ 一番ずつに積み立てて 川口押し込む大矢声 この大漁船 二つとせ 二間の沖から外川まで 続いて寄り来る大鯛 この大漁船 三つとせ 皆一同に招をあげ 通わせ船の賑やかさ この大漁船 四つとせ 夜昼焚いても焚き余る 三杯一丁の大鯛 この大漁船 五つとせ いつ来てみても干鯛場は あき間もすき間も更になし この大漁船 六つとせ 六つから六つまで粕割が 大割小割で手に追われ この大漁船 七つとせ 名高き利根川高瀬舟 粕や油を積み送る この大漁船 八つとせ 八手の沖合若い衆が 万祝揃えて宮参り この大漁節 九つとせ この浦守る川口の 明神ご利益あらわせる この大漁船 一〇つとせ 一〇を重ねて百となり 千を飛びこす万漁年 この大漁船</p>	

「神のはなみ」「ほめことば」は川口神社（明神様）をたたえ、航海安全と大漁を祈る歌である。

元治元年（1864年）、銚子ではかつて無いほどのイワシの大漁があり、この大漁を祝うために作られたのがこの「銚子大漁節」だと伝えられている。その内容はイワシの大漁にわく銚子の様子と、この大漁は航海の安全を守る川口神社（明神様）の御利益だという歌である。

「木遣り」は仕事歌とも言われ、もともと大人数の力が必要な現場で歌われた民謡の一種である。

【参考文献：「川口地区の歴史と民族」永沢謹五】